

西洋比較演劇研究会 第236 会例会

日時： 7月27日(土) 14:00- 18:00

会場： 成城大学5号館1F 5111 会議室

\* 設備の関係で対面開催のみとなります。

内容： <演劇理論カフェ①>

「基礎的ないくつかのトピックをめぐって——上演・劇・芝居・戯曲、劇作家／劇作法、  
劇の閉包構造と開放構造、演出と演出家、リアリティーとシアトリカルティー」

パネリスト：

稲山玲（静岡文化芸術大学）・關智子（早稲田大学）・田中圭介（玉川大学）・新沼智之  
（玉川大学）・山下純照（成城大学）

進行：

14:00-14:05 趣旨説明（山下）

-14:15 「上演・劇・芝居・戯曲」問題提起（山下・新沼）

-14:30 「上演・劇・芝居・戯曲」ディスカッション（パネリスト）

-14:50 「上演・劇・芝居・戯曲」フロア・ディスカッション

14:50-15:00 「劇作家／劇作法」問題提起（山下・稲山）

-15:15 「劇作家／劇作法」ディスカッション（パネリスト）

-15:35 「劇作家／劇作法」フロア・ディスカッション

15:35-15:45 「劇の閉包構造と開放構造」問題提起（山下・關）

-16:00 「劇の閉包構造と開放構造」ディスカッション（パネリスト）

-16:20 「劇の閉包構造と開放構造」フロア・ディスカッション

16:20-16:35 お茶の時間

16:35-16:45 「演出と演出家」問題提起（山下・田中）

-17:00 「演出と演出家」ディスカッション（パネリスト）

-17:20 「演出と演出家」フロア・ディスカッション

17:20-17:30 「リアリティーとシアトリカルティー」問題提起（山下）

-17:45 「リアリティーとシアトリカルティー」ディスカッション（パネリスト）

-18:00 「リアリティーとシアトリカルティー」フロア・ディスカッション

趣旨

研究会ではこれまで個人研究発表、シンポジウム／パネル・ディスカッション、合評会と  
いう3本の柱で年間6回の例会を構成してきました（以前は4月の総会のあとに講演会を  
組んでいましたが3年前からは総会後にも通常の例会を行なっています）。今年度からは例

会内容の一層の充実をはかるため、「談話」「カフェ」という新しい枠を導入しています。必ずしも研究発表ほど完成されたものでなくてよく、ざっくばらんな知識・経験の共有と話し合いの機会を設けたいというのが趣旨です。「談話」は相対的に講師の語りの比重が高く、「カフェ」は聞き手の発言および会場の議論の比重が高いという設定です。「カフェ」では文字通りお茶の時間を設けたいと思っています。

今回は<演劇理論カフェ>です（今後は<演劇史カフェ>や<上演分析カフェ>などもやっていけるとよいのではないかと考えています）。しかも<演劇理論カフェ>の初回として、「基礎理論」に光を当てます。初回なので<①>です。ここで理論というのは本質論の意味です。つまり「…とは何か」を心ゆくまで論じようという試みです。

このように言うと、「今更?」「何を青臭い」「初心者ではあるまいし」と感じるかもしれません。しかしそうではないと考えています。演劇学において定番と言える理論ないし学説は言うまでもなく存在してはいます。しかし時代とともに演劇研究の焦点は更新されていき、新しい言説には触れやすい反面、過去の定説がアクセスにしにくくなるという逆説が生じています。さらに、過去の定説もやはり現在の観点から修正が必要な部分もあるはずです。

例えば戯曲について。上演を扱う学としての演劇学という理解が一般化した現在において、戯曲の理論などはもう省察の必要はないのでしょうか。劇文学理論の古典と言えばアリストテレスの『詩学』で、現在でも容易に翻訳で接することができます。しかしギリシア悲劇の理論である『詩学』だけではシェイクスピアも、ゲーテも、チェーホフも論じることができません（ピランデッロ、ブレヒト、ベケット以降は言うまでもなく）。他方、遅くとも19世紀後半には、それまでの劇文学のかなりの範囲を視野に収めた戯曲の理論が完成しています。それは劇作家、文化史家でもあったグスタフ・フライタークの *Die Technik des Dramas* (1863年) です。自然主義前夜の仕事ですが、歴史的リアリズムへの目配りもあり、性格分析や劇構造論としてはチェーホフあたりまでは適用可能な理論です（もちろん、チェーホフにはそこから逸脱する面もあるわけですが）。菅原太郎訳（春陽堂、1938年）、末吉寛訳（改造社、1939年）、島村民蔵訳（1949年）と3種類もの邦訳が出たもののがかなり前からいずれも入手困難です。英訳（2018年）もあるようですが果たして参照されているのでしょうか？フライタークの理論はいわゆる「五部三点説」ばかりが有名ですが、それはこの本のほんの一部に過ぎません。その後1960年にスタイヤン (J.L. Styan) の *The Elements of Drama* が出て、筆者は大学院時代にこれで勉強しました（学部生も読まされていました）。近代劇までをカバーしています。邦訳はなく現在読まれているかどうか不明です。同じ1960年にはクロッツ (Volker Klotz) の *Geschlossene und offene Form im Drama* (邦訳『閉じた戯曲 開いた戯曲』早稲田大学出版局、1990年) が出て、ブレヒト的な解放構造の劇を論じる手がかりになっています。

ここ30年くらいの中に英語とドイツ語でかなりの数の戯曲分析論が出版されています。英語圏では「scriptをどう読むか」、ドイツ語では「戯曲分析へのガイダンス」という形で書かれることが多いように見えます。全くと言ってよいほど邦訳はありません（英語からの翻

訳が少しありますが、私見ではその原書はあまり充実したものではないように思います)。レーマンの『ポストドラマ演劇』やフィッシャー＝リヒテの『パフォーマンスの美学』は邦訳された一方で、近年の戯曲論はまったく紹介されていないのです。これはおそらくそうした本は「新しくない」からです。先端的な知見をもたらすものではない。紹介する価値があるとしたら学生向けであるのに日本では演劇学の学生がそもそも少なく、芝居をやりたい学生は多くても座学で演劇を深めたい学生はさらに少ないため市場として成立していないのでしょう。

こうした情勢をみると、「上演としての演劇」についての議論が活発化していく（そのことじたいは歓迎すべき）傾向の一方で、「戯曲としての演劇」（この言い方自体に抵抗感が予想されるので当日議論したいと思っています）については基礎的な共通理解が失われていくのかもしれないという気がします。＜演劇理論カフェ①＞では、フライタークやスタイヤン、クロッツの仕事を知っている立場から、しかし彼らの言説を紹介するという姿勢ではなく、彼らに学んだ上で現在の演劇研究の流れにも身を浸しているというスタンスで、私たち自身の基礎理論を共有し、再検討したいと思います。

以上は戯曲論に即して書きました。「劇作家と劇作法」「劇の開放構造と閉包構造」という2つのトピックがそれに該当します。

演劇理論はもちろん戯曲論だけではありません。今回は用語論として「上演・劇・芝居・戯曲」、演出論として「演出と演出家」、また観客の目線で上演の組成を論じる「リアリティーとシアトリカリティー」を論じる予定です。

例会の進め方は、たたき台になるテキストを用意しておき、それをもとにテキストの担当者が問題提起を行い、他のパネリストを交えて自由に論じた後、会場に議論を開いていきます。会場との議論に十分な時間を確保したいと思っています。たたき台のテキストは参加予定の会員にもあらかじめメール添付でお送りいたします。そのため、今回は参加希望の方には予め下記の連絡先まで連絡をいただきたいと思っています。

連絡先：山下純照 [y3yamash@seijo.ac.jp](mailto:y3yamash@seijo.ac.jp)

締め切り：例会当日の開始1時間前まで（7月27日13:00）

登壇者プロフィール

稲山 玲（いなやま れい）

静岡文化芸術大学文化政策学部講師。博士(文学)。野田秀樹、井上ひさしらの作品を中心に戦後日本演劇における天皇表象を研究。近年の論文に「『夢の痂』に見る井上ひさしの天皇観」(西洋比較研究、Vol.21、2022年)、「野田秀樹『贗作・桜の森の満開の下』の国家形成に見られる「二項対立構造」と「円環運動」(近現代演劇研究会、第9号、2020年)など。

關 智子（せき ともこ）

博士（文学）。早稲田大学文学部講師（任期付）。専門は現代イギリス演劇、戯曲論。第16回小田島雄志・翻訳戯曲賞、第29回 AICT 演劇評論賞受賞。著書に『逸脱と侵犯 サラ・ケインのドラマトゥルギー』（水声社、2023年）。

田中 圭介（たなか けいすけ）

演出家、俳優指導者、ワークショップデザイナー

玉川大学芸術学部准教授。演劇・オペラ・ミュージカルなど様々なジャンルの演出を手がける。近年では東京芸術劇場主催 TACT 音楽朗読劇「シンデレラ」「ヘンゼルとグレーテル」、長田育恵が主宰、脚本を手がける演劇ユニットてがみ座「風紋～青のはて～」演出。また演劇団体「身体の景色」にて2012-2013年には密陽演劇祭（韓国/密陽）に、2014年にはソウル・シェイクスピアフェスティバル（韓国/ソウル）に招聘される。ワークショップファシリテーターとして全国の小・中・高校の他、地方自治体、企業などと連携したワークショップの企画や取り組みなども行っている。

新沼 智之（にいぬま ともゆき）

玉川大学文学部准教授。西洋演劇の近代化プロセスを研究テーマとしている。研究論文「演技の近代化プロセスにおけるゲーテの演技観」（『西洋比較演劇研究』Vol.18, No.1, 2019）、研究ノート「芝居を見るということと芝居について語るということ」（『芸術研究』13号, 玉川大学芸術学部, 2022）。シラー『オルレアンの乙女』翻訳（『ベスト・プレイズII』[論創社, 2019年] 所収）。

山下 純照（やました よしてる）

成城大学文芸学部・文学研究科教授。演劇理論（フィッシャー＝リヒテ：共訳『演劇学へのいざない』2013、共編著『西洋演劇論アンソロジー』2019）、近現代のドイツ演劇（シラー、クライスト研究）、日本現代演劇（野田秀樹、岩井秀人、前川知大ら）、「演劇と記憶」「劇のナラトロジー」研究。論文については Research Map を参照。

